

海という悪魔

市川
雄祐

○人物表

- ・川西諒（15歳） 高校一年生。
- ・川西麻里（15歳の姿） 諒の姉。高校一年生の時に死亡。
- ・川西幸子（55歳） 諒の母親。シングルマザー。
- ・松井公輔（15歳） 高校一年生。諒の親友。
- ・浅川先生（35歳） 諒が通う高校の先生。担当教科は古文。
- ・歯科医（45歳） 諒が通う矯正歯科の医師。

○矯正歯科医院

様々な器具が揃った矯正歯科医院である。川西諒(二五)、施術椅子に横たわっている。横に歯科医(二五)が立っている。

諒の口内に、ゴム器具が入っている。

諒、口をパクパクし、ゴム器具が伸縮する。

歯科医「ゴムの器具をつけたことで鈍痛が数週間続くと思いますが、治療のためなので我慢してくださいね」

諒「はい、頑張ります」

○歯科医院の入り口のすぐ外

諒、歯医者への入り口から出る。

手で口をおさえながら（口内は見えるように）、しかめっ面で口をパクパクさせる。

○川西家の仏間(夜)

川西麻里(二五歳時)の写真が飾ってある仏壇が置かれている。

諒、パジャマ姿で仏壇の前に座っている。その後ろに川西幸子(55)が座っている。

諒、線香を線香入れから取り出し、ロウソク台のロウソクから火をもらい、供える。リンを1回鳴らし、合掌。10秒ほどの沈黙。

諒、合掌を終え、後ろを振り返る。

諒「ちょうど今年が18回忌ってやつだっけ。でも会ったことのない姉さんを偲ぶってというのはやっぱり変な感じだな」

幸子「それはまあ、諒はそうかもしれないけど、私はやっぱり片時も忘れたことはないわ、いつでも近くにいるような気がしているものよ」

諒「そんなもんなんだね」

幸子「そうよ。ちょうど今の諒と同じ15歳の時、いきなり麻里がいなくなっちゃったんだから。諒はこれまでケガもなく健康に生きて来れてホント良かった」

諒「そりゃあこんな心配性でいられたら、危険なことにはできないよ。姉さんが海で死んだから、海に行くことは禁止だったしね。臨海学校も休んだじゃない」

数秒の沈黙。

幸子「あなたが生きがいたから、あなたを失いたくない気持ちはわかってね」

諒「わかってるって。じゃあ僕は寝るから、お休みなさい」

諒、立ち上がって仏間を出る。

○諒の部屋（夜）

部屋に入り、そのまま布団に入る。

口を二度パクパクさせ、目を閉じる。

○海（夜）

（このシーンは白黒映像である。）

夜の海である。波の往来が激しく、突堤に時折波がかぶさっている。

麻里の声「こっちにおいで、こっちにおいで」

激しい波が岩と衝突し、波の音が大きくなる。

○諒の部屋（朝）

（カラー映像に戻る。）

「諒、ガバツと起き上がる。ハアハア言いながら、口をパクパクさせる。

○学校の教室

古文の授業中である。諒のほか、10人の生徒が授業を受けている。

浅川先生(35歳)が、黒板に書かれているラ行変格活用を表を指で指す。

浅川「えー、ラ行変格活用はこのようになるから、ノートに写して」

諒、口をパクパクさせながらノートを殴り書きする。

浅川「はい、じゃあみんなで復唱しましょう、あり・をり・はべり・いまそかり」

生徒一同「あり・をり・はべり・いまそかり」

諒だけ目がひん剥き、口を大きく開けた状態で復唱する。

浅川「はいもう一度、あり・をり・はべり・いまそかり」

生徒一同「あり・をり・はべり・いまそかり」

浅川「先生、トイレ行ってきます！」

と言うと同時に席を立ち、教室から出て行く。

浅川「どうしたんだあいつ…今日変だな。まあ授業進めるか！」

○学校のトイレ

洗面台が水で満杯になっている。諒、口をパクパクさせながら、洗面台に覆いかぶさるように立ち、手で水をチャプチャプさせて波を立てている。

そこに松井公輔(29)が来る。

公輔「お前何やってんだ？今日なんか変だぞ」

諒「分からないけど、昨日海の夢を見てから、海に行きたくてしょうがないんだよ。海に行けないから、これで再現してるんだよ」

と、手で水をチャプチャプさせる。

公輔「はあ？海？行けばいいじゃん、そんなの」

諒「俺んち海行けないのお前も知ってるだろ、母さんが高齢出産でシングルマザーだから、迷惑かけらんないのよ」

公輔「でもお前、今日相当変だぞ。常軌を逸してるよ。いきなりトイレに行くし、

洗面台で変な遊びするし」

諒「これで波の代わりにしてるんだよ、こうしてると落ち着くんだ」

諒、手で水を豪快に弾く。

水が洗面台から出て、公輔が水を被る。

諒「あっ」

○諒の部屋（夕）

諒、年季の入った勉強机に向かい、制服姿で勉強している。

ノートには、数学の方程式、歴史の年号、古文の変格活用などが乱雑に書かれている。

口をパクパクさせながら、目をしかめてノートに殴り書きをする。

ノートが再度写ると、そこには「海海海海…（略）」と海の文字が多数書かれている。

諒、突然部屋を走って出て行く。

○川西家の風呂（夕）

諒、息切れしながら風呂場に入る。

水が貯めてある湯船に手を入れ、水をチャプチャプさせて波を立てる。

諒、ゆっくりと首をかしげる。

そのまま小走りで風呂場を出て行く。

○川西家の玄関(夕)

諒、玄関の扉を開け、小走りです外に出る。

○歩道(夕)

諒、歩道を小走りする。

信号を待っている間、口をパクパクしながら足踏みする。

○スーパー銭湯の建物(夕)

諒、スーパー銭湯の入り口に、小走りしながら入って行く。

○スーパー銭湯の大浴場(夕)

諒、大浴場の入り口の扉を開け、中に入る。

浴場内には、他の客は誰もいない。

入ると共に、目をキョロキョロさせながら、中を一周する。

ジェットバスを見つけると、一目散に中に入る。

ジェット噴流を背中に受け、笑顔で口をパクパクさせるが、数秒後にゆっくりと首をかしげる。

○諒の部屋（夜）

諒、パジャマ姿で自分の部屋にゆっくりと入る。

あくびをした後、ベッドにドサッと倒れこむ。

○海（夜）

（このシーンは白黒映像である。）

夜の海である。波の往来が激しく、突堤に時折波がかぶさっている。

突堤の先端に、麦わら帽子に白いワンピースを着た麻里が後ろ向きで佇

んでいる。

麻里、麦わら帽子を頭から取り、海に投げ入れる。

波に揉まれる麦わら帽子。

麻里の声「諒、諒、こっちにおいで。今こそ来る時よ」

海に沈む麦わら帽子。

○諒の部屋(夜)

(このシーン以降も、引き続き白黒映像である)

諒、無表情でゆっくりと上半身を起こす。

音を立てずにベッドから出た後、部屋を出て行く。

○川西家の階段(夜)

諒、無表情のまま口をパクパクさせながら、音を立てずに階段を降りる。

○歩道(夜)

諒、裸足でパジャマ姿のまま口をパクパクさせながら、歩道をゆっくり歩く。

○高校前(夜)

諒、口をパクパクさせながら学校前の道を横切る。

○暗闇の道(夜)

街灯がない暗闇の道でも諒は変わらない速度で歩き続ける。

(照明を徐々に消していき、最終的に画面全てが暗闇になる)

○海の浜辺(夜)

暗闇に、突然火が現れる。

火の大写しから、徐々にズームアウトしてその場所の状況が示される。火

は焚き火であり、焚き火の周りを囲むように山羊の人形が置かれている。

ズームアウトは維持され、最終的に浜辺に焚き火が置かれていることが

示される。

そこに、無表情で口をパクパクさせている諒が来る。

麻里の声「さあ、目を覚まして」

諒「ハッ」

と言い、2回瞬きする。

麻里が突然現れる。笑っている。

諒「ここは、海？いつの間にかあなた、ここはどこ…」

数秒の沈黙。

諒「あなたは…姉さん？」

麻里「そうだよ、諒、初めましてだね」

麻里、ゆつくりと微笑む。

麻里「でも、もうあなたは逃れられない」

諒「えっ」

麻里「私もそうだった、二歳、子供と大人の間の年齢。私の場合、チューイン

ガムを一晩中噛んでいたことだったな。口の中という小さい海に、波の運動を

起こすと、海の悪魔に見つかってしまっんだ」

諒「海の悪魔…」

麻里「そう、もう見つかってしまったんだよ。弟だけど仕方がない、それが世界

なの」

諒「悪魔…世界？」

麻里「さあ、もう行きましょう。こっちにおいで」

諒、口をパクパクさせながら首を横に振るが、自然と足が動く。

○突堤の先端(夜)

麻里の後を諒がついて行き、二人は突堤の先端まで行く。

突堤の先端で、麻里は諒を先端の際に行かせ、自分はその後ろに位置取る。

麻里「これであなたも私と一緒に。夜の帳の中で生きるの」

麻里が諒の背中を押そうとした瞬間、「ビュー」という音がして、風が麻

里の髪を靡く。

麻里、手で顔を覆う。

風の音が止む。

麻里、顔を上げ、上空を見る。

雲間からゆっくり満月が出てくる。

麻里「そうだった、お母さんがまた悲しんじゃうな」

麻里、諒を自分の方向に回転させ、ゆっくりと抱きしめる。

波の音が響いている。

麻里、諒をゆっくりと引き離す。

麻里「いい？これから私が言うことを必ずおこなって欲しい。そうじゃなきゃ、

あなたは元の世界に戻れなくなってしまうから」

諒「わかった。何をすればいい？」

麻里「私はこれから人形になる。それを焚き火で燃やして、供養してほしいの。」

それから、山羊の人形も全部燃やしてほしい。私が全部道連れにするから」

諒が目を見開く。

諒「そんな…そんなことして姉さんは大丈夫なの？本当にいなくなっちゃうん

じゃないの？」

麻里「いいんだよ、これは私が解放されるためでもあるから。だからあなたは私

を助けると思ってた燃やしてほしい」

諒「わかった、わかったよ。でも…」

麻里「月が雲に隠れるまでの間に燃やして。時間はないから、頼んだよ」

「ビュー」という音がして、風が諒の髪を靡く。

諒、手で顔を覆う。

風の音が止む。

諒が手を離し、目を開けると、地面に白いワンピースの人形が落ちている。

諒、急いで人形を拾い上げ、浜辺に向かう。

上空にあるのは、満月と、遠くから月に向かう雲。

○海の浜辺(夜)

諒、焚き火の前まで走ってくる。

そして、ワンピースの人形を焚き火の傍に置く。

そして、焚き火の周りの山羊の人形を乱雑に火の中に投げ入れる。

波の音が大きくなる。

満月に雲が被ろうとしている。

山羊の人形を全て火の中に入れて後、諒はワンピースの人形を拾い上げ、

じっと見つめる。

数秒見つめた後、ふと顔を上げる。

満月に雲が被る寸前である。

諒、しかめっ面で口を一回だけパクした後、ワンピースの人形を火の中に入れる。

波の音が一瞬とても大きくなった後、静かになる。

満月にかかるはずの雲がなくなっており、夜空に満月のみが輝いている。

諒、焚き火に向かって合掌する。

○諒の部屋（朝）

（このシーンから、カラー映像に戻る。）

諒、ゆっくり上半身を起こす。

無表情のまま、涙が頬をツーンと流れる。

その後、ゆっくりと笑顔になる。

○学校の教室

古文の授業中である。諒のほか、10人の生徒が授業を受けている。

浅川先生が教壇の前に立っている。

浅川「はい、昨日の復習です。ラ行変格活用は何だったっけな？みんなで一緒に

言いきましょう。せーの」

生徒一同「あり・をり・はべり・いまそかり」

諒、他の生徒と同じように答える。

浅川「はい、もう一回！」

生徒一同「あり・をり・はべり・いまそかり」

浅川「よし！バッチリだな。それじゃあ次の活用行くぞ！」

○学校の廊下

諒と公輔、教室の廊下で窓に寄りかかっている。

公輔「お前、今日普通だな。昨日変だったから、心配だったんだよ」

諒「そうか？お前だけだぞ、そんなこと言ってるの」

と笑う。

公輔「昨日海に行けたのか？」

諒「行った…のかな？」

公輔「何はともあれよかった」

多数の生徒が廊下を行き交っている。

○川西家の仏間(夜)

幸子が仏壇の前に座っており、合掌している。

そこに諒が入ってくる。

幸子、合掌を終え、諒の方向に振り返る。

諒「母さん、実は話があつて」

幸子「何？」

諒、仏間の畳に座る。

諒「姉さんのことで…実は母さんと一緒に海に行きたいんだ、姉さんがいなくな

った海に」

幸子「いきなりどうしたの？今まで麻里のことなんて考えてなかったじゃない」

諒「僕なりに色々考えたんだ。やっぱり海で祈ったほうがいいよ。母さんは行き

たくないかもしれないけど…やっぱり家の中じゃなく、海に行った方がいい

い！」

幸子「諒の言うこともわかるけど…あそこに行くのは本当に辛くて…でも、考え

ておくわね」

仏壇の中に線香が二本あり、煙が揺らめいている。

○海

昼の海である。陽光と共に、波が激しく行き交う。

サーフィンを行なっている男性や、浜辺で遊ぶ子供達がいる。

○突堤の先端

諒と幸子、突堤の先端までゆっくり歩いて来る。

諒は手に花を持っている。

幸子「諒の言う通り、やっぱりここに来なければいけないのかもしれない」

数秒の沈黙。

幸子「麻里、今までお花をあげられなくてごめんね」

幸子、手で顔を覆って泣く。

諒「母さん、姉さんは今日母さんが来てくれて喜んでると思うんだ。さ、このお

花を海に投げよう」

諒、幸子に花を渡す。

幸子「麻里、今までありがとう。これからもよろしくね」

幸子、海に花を落とす。

その瞬間、「ビュー」という音が聞こえ、風が諒と幸子の髪を靡く。

二人、手で顔を覆う。

風が止まる。

諒と幸子、顔を覆っていた手をどける。

そこにあるのは、太陽と、青空と、昼の海。

(終わり)